



北方民族博物館だより

No. 101



H1.48.1 海獣狩猟用アザラシ毛皮製浮き袋 エスキモー 20世紀
米国 アラスカ セントローレンス島 ギャンベル

鉈もりを打ち込まれた海獣は、水にもぐってのがれようとするが、ハンターが鉈先につけた鉈網を確保していれば獲物はのがれることができない。しかし、獲物に引かれて船が転覆する危険もあり、特に大型のセイウチやクジラ類ははげしく動きまわるため、鉈網の端にはアザラシの皮、海獣の内臓や木で作った浮き袋をつけて放し、獲物が疲れるのを待つ。

目次 Contents

- 1 表紙 海獣狩猟用アザラシ毛皮製浮き袋
- 2 ロビー展「音を奏でる狩猟具 枅谷隆男のシカ笛コレクション」
／講習会「シカ笛づくり」 講座「世界のシカ笛 狩猟と音楽の源流を求めて」
- 3 館長講座「遺跡は何故できるのか」
／講座「『国際博物館の日』記念事業 東日本大震災と文化財レスキュー」
- 4 INFORMATION



北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

ロビー展

音を奏でる狩猟具
枡谷隆男のシカ笛コレクション

2016. 4. 14-5. 12

シカ笛は、シカをおびき寄せたり、シカに警戒されずに人間が近づくために、シカの鳴き声をまねた音を出すのに使われる狩猟具です。本展では、シカ笛研究家・枡谷隆男氏のコレクションを中心に、さまざまなシカ笛や関連する狩猟具などを紹介しました。

鳥獣の狩猟方法の一つに、動物の姿や鳴き声、臭いなどで獲物をおびき寄せて捕獲する「おとり猟」があります。動物の鳴き声をまねた音を出す狩猟具は「おとり笛」と総称され、シカ笛もその一種です。シカ笛には、発情期のオスの鳴き声をまねて、なわばりを争う競争相手のオスをおびき寄せたり、発情期のメスの鳴き声をまねてオスをおびき寄せたり、仔ジカの鳴き声をまねて母ジカをおびき寄せたりなどの使い方があります。

スポーツとしての狩猟が盛んな米国では、獲物となるシカの種類ごとに異なるシカ笛があります。また、性別や年齢、鳴き声の種類によっても異なるシカ笛が使い分けられます。このように多種多様な米国のシカ笛は狩猟の実用品として普及し、その一部は日本の狩猟用品店などでも販売されています。

北米やユーラシア各地などの先住民には、樹皮や木で作られた筒状のシカ笛が見られます。これらのシカ笛には、吹奏（息を吹いて音を出す）、吸奏（息を吸って音を出す）、そしてメガホンのように人がシカをまねる声を増幅させるなどの用法があります。

北海道アイヌや、本州北部で狩猟を行ってきたマタギの人びとは、凸形の本体片面に発音源となる膜を張ったシカ笛を使用してきました。類似の製品は九州や本州南部の遺跡等でも発見されており、日本列島各地で使用されていたことがわかります。

シカ笛以外でおとり笛として使われるものに「鳥笛」や「肉食獣の呼び笛」もあります。これらの各種おとり笛のほか、関連する資料として、狩猟用のラッパなども紹介しました。

本展では、実物資料以外に、実際のシカの鳴き声（録音）や、枡谷氏によるシカ笛・鳥笛の実演映像も紹介しました。また、シカ笛を自由に作って鳴らせる「製作体験コーナー」も、人気を集めました。（学芸グループ 山田 祥子）



ロビー展展示資料の例（いずれも枡谷氏蔵）。左：米国Scotch社製のシカ笛（オジロジカ・オグロジカ・ミュールジカ用）。写真右下の部分を噛むようにして吹く、

仔ジカの鳴き声をまねて親ジカや肉食獣をおびき寄せる。右：北海道アイヌのシカ笛。豊川重雄氏製作。イチイ(木)製の本体に文様が彫刻されており、その裏側には発音源となる魚皮が張られている。

講習会

シカ笛づくり

2016. 4. 16

講座

世界のシカ笛
狩猟と音楽の源流を求めて

2016. 4. 17

講師 枡谷 隆男氏

(学校法人柏学園南幌みどり野幼稚園園長／当館研究協力員)

ロビー展関連事業として、枡谷隆男氏を講師にお招きし、講習会と講座を行いました。一日目は、講習会「シカ笛づくり」を開催しました。子どもから大人まで参加され、身近な材料で簡単にできるシカ笛を三種類作りました。

シカ笛づくり一種類目は、二枚の木片にリボンをはさんで作るシカ笛です。横向きにして口にくわえ、息を吹いたり吸ったりして音を鳴らします。

二種類目として、北海道アイヌやマタギのシカ笛の模型を作りました。本来は堅い木を加工して作るものですが、今回は柔らかい木の板、ストロー、セロハンで簡単に作る方法を学びました。

最後に三種類目として、中国オロチョンの白樺皮製シカ笛の模型を、ストローを切って作りました。これは作るのとはとても簡単ですが鳴らすのにコツが要ります。参加者は講師からコツを学びながら、演奏を試みていました。



自分で作ったシカ笛（一種類目）を試す参加者

二日目は講座「世界のシカ笛 狩猟と音楽の源流を求めて」を開催しました。

北見市出身の枡谷氏は、国立音楽大学を卒業後、北海道内の高校で音楽教師を務めるなかで、音楽の起源に深い関心を払ってきました。音楽起源論には、自然模倣説、呪詛起源説など30ほどの説があるそうです。枡谷氏は25年前、北海道アイヌのシカ笛との「出会い」をきっかけに、狩猟と音楽との密接な関係を知り、不思議な魅力に取りつかれるようにシカ笛研究に取り組んできました。そして、いわゆる「楽器」の音色の源流に動物の声があるのではないかと考え、教師を退職して幼稚園園長を務める現在も、精力的に研究を続けています。

本講座では枡谷氏から、ロビー展展示資料の実演や解説、ご自身の研究体験談なども交え、音楽起源論や世界のシカ笛の特徴について、熱のこもった講演をいただきました。

（学芸グループ 山田 祥子）



ロビー展会場で、シカ笛を実演する枡谷氏

館長講座

遺跡は何故できるのか

2016. 3. 26

講師 岡田 淳子（当館館長）

平成27年度最後の教育普及活動として、岡田淳子館長による講座を開催しました。本講座のテーマ「遺跡は何故できるのか」は、館長が長年取り組んできた研究テーマの一つです。そのきっかけは、「遺跡に住んでいた人たちはどこへ行ってしまったのか」という問いに答えたいというものでした。

人が住むことをやめ放置した場所が遺跡となります。つまり(1)なぜここに人が住まなくなったのかと、(2)住んでいた人たちはどこへ行ったのかをさぐる必要があります。

アラスカの採集狩猟社会であるユピック・エスキモの遺跡（廃村）からこのことを考えてみます。

調査対象のグループは、5つのさらに小さなグループから構成されていました。生活の範囲は3000～5000km²と広大で、季節的移動生活をしていました。ただし一般に思われているのとは逆で、夏はグループ全員が集まり、冬は数か所の村に分かれて暮らしていました。

最も古い遺跡は現在より暖かい時期、紀元前1100～580年のもので、竪穴・平地式住居遺構が250か所もみつかりました。紀元後1500～1750年には、居住地が以前より海に近い浜と海岸段丘上になりました。その後1700年代に毛皮獣を獲るための移動があり、1800年代には感染症による移動が、1920年頃には冬の村の廃棄が、1960年代には飛行場・学校・保険所の建築による移動、1980年代には村の汚濁による移動が確認でき、この頃には季節移動も竪穴住居も見られなくなりました。

ここから整理すると、移動の要因には、獲物のため、季節によるもの、環境変化、天災、社会情勢の変化、文化の進展、居住地の汚れなどがあげられます。また30～40年に一度廃棄したことも確められました。

（学芸グループ 笹倉 いる美）



会場の様子

講座

「国際博物館の日」記念事業 東日本大震災と文化財レスキュー

2016. 5. 21

講師 日高 真吾氏（国立民族学博物館准教授）

本講座は「国際博物館の日」記念事業として、2011年に発生した東日本大震災による被災文化財のレスキュー活動について紹介していただきました。

震災後、文化庁の呼びかけで東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会が設立され、被災した文化財のレスキュー活動がおこなわれました。その柱は、救出、一時保管、応急措置の3つの作業です。

「救出」は、被災現場から文化財を取り出す作業です。被災現場では、落下物や割れたガラスなどから身を守るため、マスクやヘルメット、長そで・長ズボンの作業服、安全靴などの装備が必要でした。

「一時保管」は、救出した文化財を安全な場所へ移送し、保管する作業です。安全な保管場所を確保し、避難所対応に追われている文化財担当者の立会いを求め、限られた時間のなかで一気に輸送する必要がありました。

「応急措置」は、救出した文化財の劣化が一気に進まないための処置をする作業です。民俗文化財の場合、まず表面の砂やヘドロの除去を優先的に実施しました。

その後、一時保管場所での管理の長期化により、被災文化財に対する虫やカビなどの被害が心配されてきました。そこで、一時保管場所の環境を測定し、保管に適した状態に保つように努めました。また、津波で文化財に浸透した塩分はカビや錆びの原因となるため、脱塩技術の開発を進めてきました。

現在、被災した文化財の本格的な保存修復が進みつつあります。今後は、こうした被災文化財をいかにして元の地域文化財に再生するのかということを考えていく必要があります。

講師は、写真やビデオを使いながら、レスキュー活動の状況や今後の課題を詳しく説明してくださり、参加者の理解も深まった様子でした。（学芸グループ 中田 篤）



日高 真吾氏

第31回特別展 北からの文化の波 ―北海道の旧石器からオホーツク文化まで―

先史時代の北海道は、後期旧石器時代、縄文時代早期、オホーツク文化期の3時期に北方の文化の影響を受けていたことがわかっています。後期旧石器時代にはシベリアから「石刃技法」、「細石刃技法」と呼ばれる石器づくりの方法、縄文時代早期にはアムール川流域・サハリンから特徴的な鏃をもつ「石刃鏃文化」、そして、本州の古墳時代にあたる時期には、サハリンから海にたよる暮らしを営んだ「オホーツク文化」が北海道に波及してきました。

本特別展では、出土資料の展示を通じて、北方から影響を受けた北海道の先史文化について紹介します。

会 期 平成28年 7月16日(土)～10月16日(日) *休館日 10月3日(月)、10月11日(火)

会 場 北海道立北方民族博物館 特別展示室

観覧料 一般450円、65歳以上300円、高校・大学生200円(常設展示とのセット割引もあります)

特別展関連事業

講座「人類の進化と北方への進出 考古学の証拠から」7月16日(土) 10:30-12:00

講師：長沼 正樹氏(北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授)

講座「オホーツク文化の骨角製品と展示解説」7月24日(日) 10:30-12:00 講師：種石 悠(当館 学芸員)

はくぶつかんクラブ「土器づくり」7月30日(土) 10:00-12:00 講師：菅原 章子(当館 解説員)

はくぶつかんクラブ「考古学入門シリーズ 縄文土器の文様づくり」8月6日(土) 10:00-12:00 講師：種石

講座「北アメリカの先史文化の誕生と北海道の旧石器文化」8月20日(土) 10:30-12:00

講師：中沢 祐一氏(北海道大学医学研究科 助教)

講習会「オホーツク文化のトナカイ角彫刻を作る」9月3日(土) 13:30-15:30 講師：種石

講座「北海道博物館紀行 羅臼町郷土資料館」9月17日(土) 13:30-15:00

講師：天方 博章氏(羅臼町郷土資料館 学芸員)

INFORMATION

行事報告

◆3月11日(金)、12日(土)、講習会「とんぼ玉づくり」(講師：笹倉 いる美学芸主幹)を開催しました。

◆4月30日(土)、はくぶつかんクラブ「カラフルまが玉づくり」(講師：本間由美解説員)を開催しました。

◆4月24日(日)、講習会「お細工物づくり」(講師：浜田智津子氏)を開催しました。



講師の浜田智津子氏

◆5月3日(火・祝)～5月5日(木・祝)こどもの日関連イベントとして「顔出しパネル(ナーナイの花嫁衣装・トーテムポール)」を設置しました。

また「ころころフェルトボールのストラップづくり」、「粘土でつくる北のキーホルダー」、「革の三つ編みブレスレットづくり」を開催しました。



完成したストラップを持つ参加者

◆5月5日(木・祝)、上映会「北方民族映画館」(講師：野口泰弥学芸員)を開催しました。

◆5月28日(土)、施設見学会「道立オホーツク公園・北方民族博物館施設見学会」(案内：山田祥子学芸員、工藤秀記オホーツク公園課長)を開催しました。



見学会の様子

お知らせ

◆体験コーナーに馬の鞍体験、衣装体験を設置しました。



鞍体験コーナー

◆タイからの来館者増加にともない、タイ語の音声ガイドとリーフレットを用意しました。

北方民族博物館だより
No. 101

平成28(2016)年6月21日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
<http://hoppohm.org>
指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会